

# ある魔術師のサクセスストーリー

—ルキアノス『偽預言者アレクサンドロス』—

前野弘志

【キーワード】古代地中海世界、宗教、魔術師、魔術、呪詛板、医者

## はじめに

### 1. ペテン師あるいは魔術師

ルキアノス<sup>1)</sup>の著書『偽預言者アレクサンドロス』*Ἀλέξανδρος ἢ ψευδομάντις*<sup>2)</sup>は、次の書き出しで始まる。「君はおそらく、最も親愛なるケルソスよ、小さな取るに足らない指示だと思っているかも知れないがね、アボヌテイコス人のペテン師 γόητος アレクサンドロスの生涯、彼の計画、恥知らずな所業、そして騙しのテクニック μαγανείας を書き物にしたために君に送れという依頼のことを」(*Alex.1*)。ここで「ペテン師」と訳した γόητος という語には「魔術師」という意味もあり、「騙しのテクニック」と訳した μαγανεία という語には「呪法」という意味もある。つまり古代においても、いわゆる「魔術」を信じた人もいれば、ペテンだと非難した人もいた訳で、著者ルキアノスは後者の急先鋒であった。

### 2. クロノロジー

このアレクサンドロスについては、ルキアノスの著作以外からは何も知られていないが、彼が著者と同時代に実在した人物であったことは間違いない (Harmon [1925], p.173; Ozanam [2018], p.689)。著作の内容から推察して、アレクサンドロスが生まれたのは105年頃、一方、ルキアノスが生まれたのは120年頃である。アレクサンドロスは子供の頃、男娼をして生計を立てていたが、顧客の一人に魔術師がいて、彼に弟子入りしたという。アレクサンドロスの顔がヒゲで満たされるようになった頃、つまり17歳くらい (122年頃) のことであろうか、師匠が亡くなったのを機に、彼は修行の旅に出た。そして約23年間、遍歴魔術師をしながら、故郷アボヌテイコスに新アスクレピオスたる、人頭蛇身の神グリュコンの神託所を建設することを計画した。彼の計画が実現したのは145年頃 (40歳頃) のことと考えられている。オープン以来、彼の神託所はたちまち大評判となり、その名声は小アジアのみならず、ローマ市にも伝わった。163年頃にはマルクス・アウレリウス帝の許可を得て、アボヌテイコスにイオノポリスと改名し、165年には自分の娘を高官ルティリアヌスに嫁がせている。その年、アレクサン

ドロスは60歳頃、ルキアノスは45歳頃であった。ルキアノスはイオノポリスを164年と167年頃に訪れているが、それはまさにアレクサンドロスの絶頂期であった。アレクサンドロスの死は171年頃（66歳頃）であり、ルキアノスが彼の「伝記」を執筆したのは、その主人公の死から10年程たった180年より後と考えられている。ルキアノスが没したのは190年頃だから、この作品は彼の晩年の作ということになる<sup>3)</sup>。

### 3. グリュコン崇拝

パフラゴニア地方の中心都市の港町アボヌテイコス（後のイオノポリス）<sup>4)</sup>にグリュコンの神託所が実在し、それが単なるローカルな崇拝でなかったことは、グリュコンの姿と銘が刻まれたコイン、グリュコンに関する碑文、とぐろを巻いたグリュコン神の彫像、同じく青銅製のグリュコンの護符像などが、現在のシリアからルーマニアにかけての東地中海世界各地で発見されていることで裏付けられる（Victor [1997], S.1-3）。グリュコンの図像が描かれた最古のコインは遅くともアボヌテイコスで161年には鑄造されており、それ以外では、ガラティア地方、ピテュニア地方、ミュシア地方、モエシア地方の諸都市でも鑄造されていた（Victor [1997], S.1）。アボヌテイコスにおいて鑄造された最も新しいコインは、軍人皇帝のトレボニアヌス・ガルス（在位：251-253年）時代のものであるが（Cumont [1887], p.42）<sup>5)</sup>、これは属州や都市における貨幣鑄造の終焉と同期しているだけで、これをもってアボヌテイコスにおけるグリュコン崇拝が終わったことを意味するものではない（Victor [1997], S.7）。この神託所の活動は310年頃まで続いたと考えられている（Victor [1997], S.1, S.171）。しかしその神殿の遺跡は発見されていないようだ。

### 4. ドキュメンタリー

この作品は従来、作者が風刺作家であることから、歴史的な信憑性が低く見積もられてきたが<sup>6)</sup>、近年では、歴史家ルキアノスの評価が高まり、帝政期東部における宗教史研究にとって重要なドキュメンタリーとして再評価されている（Victor [1997], S.VII）。冒頭の引用には、次の短い文章が続く。「しかしそのことは、もし一つ一つのことに正確を期そうと思えば、フィリップスの子アレクサンドロスの事績を記録することと変わらないのだよ」（*Alex.1*）。そう言いつつこの仕事を引き受けたルキアノスは、偽預言者に関する情報を丹念に収集し、正確に記録しようと目論んだに違いない。またこの書の執筆依頼者であるケルソス<sup>7)</sup>は、本文で二度言及されるが、エピクロス派の人物で（*Alex. 61*）、『魔術師を駁する』*κατὰ μάγων*<sup>8)</sup>という本の著者でもあった（*Alex.21*）。つまり本書は「魔術／ベテン」に共闘する同志に宛てた情報提供の書であったのだから（Caster [1938], p.6）、少なくとも騙しの手口に関する記述は事実と見て間違いないだろう。Victorの言を借りれば、ルキアノスはこの書で事実を報告しなかったのであり（Victor

[1997], S.25), それ故に彼が報告した事実は信頼しても良いが、彼にはアレクサンドロスを中立的に描こうという意図はなかったし、そういった訓練も受けていなかったの、彼の人物評価は信用してはならない (Victor [1997], S.26)。この点に注意を払うなら、歴史的なアレクサンドロス像を構築することは可能であろう (Victor [1997], S.26)。

## 5. 小論の目的

以上のような再評価に基づいて、筆者がこの書物に着目した理由は二つある。一つは、この作品に恐らく、呪詛板を製造販売したであろうタイプの魔術師が描かれているからである。その人物は、アレクサンドロスの師匠で、名前は伝えられていないが、自称「公共の医者」であり、有名なテュアナのアポロニオスの弟子で、アレクサンドロスは彼のもとで薬の調合と魔術を身に付けたという。もう一つの理由は、この書物から魔術師の出世の4階梯（①徒弟、②遍歴魔術師、③神託所経営者、④有力者のお抱え魔術師）が見えてくるからである。それ故に筆者は、この書物に「ある魔術師のサクセスストーリー」という副題を勝手に付けた。この4階梯は、それぞれの段階で一生を終えた魔術師の立場からすれば、魔術師の4類型でもあったと言えるだろう。この4階梯／4類型は、古代地中海世界に存在した様々なタイプの魔術師たちを分類するための座標軸となるだろう。これは同時に、呪詛板を製造販売したタイプの魔術師の位置付けにも役立つだろう。従って、ルキアノスの『偽預言者アレクサンドロス』を使って様々な魔術師の分類座標を作成すること、これが小論の目的である。

## 6. 魔術師の定義

本論に入る前に、魔術師を定義しておく必要がある。筆者は魔術師とは「神霊と交信し神霊を操る（とされる）人」と定義する。これは非常に広い概念であり、具体的には、いわゆる魔術師の他に、神官、占星術師、占い師、予言者／預言者、祈祷師、医者、哲学者などが含まれることになる。現代人からすれば違和感があるかも知れないが、古代人の感覚からすれば、これらの人々は一つのジャンルに含まれた (Caster [1938], p.14)。

## 第1章 徒弟時代（第1階梯／第1類型）

### 1. 容姿と才能

ルキアノスは、アレクサンドロスの容姿について、詳しく描写している。「さて実際に彼の身体は・・・大きく、外見は美しく、本当に神の如きであった。肌は白く、頬は毛むくじゃらという程ではなく、髪は一部は地毛であったが、一部にはかつらを被っていた・・・。眼は大いに恐ろしさと靈感を漂わせていた。声は非常に甘く、また非常によく通った。全体として、どこからも非難されるべき所はなかった。少なくともこれらの点においては」(Alex.3) と褒めちぎって

いる。また彼の知性についても高く評価している。彼は「理解力、機転の効くこと、頭のキレにおいて、大いに他の人々を凌いだ。また好奇心、飲み込みの速さ、記憶力、学ぶことの才能、これら全てのものが、あり余る程、あらゆる方面で、彼には備わっていた」(Alex.4)。これらの称賛は、それに引き換え性格は最悪だったという下げに繋がるのであるが、実際にアレクサンドロスを見知っている人もまだいたはずなので、嘘は書けなかっただろうから、彼の貴族的身体や頭の良さについては信じてよいだろう。

## 2. 生まれ

一方でルキアノスは、アレクサンドロスの生まれについては貶している。「下劣な人間であるあのパフラゴニア人たちは<sup>9)</sup>、彼の両親が二人とも無名の卑しい者であることを知っていながら、次のように言っている神託を信じた。『血筋はベルセウスの子孫、フォイボスの友、ここにおわす方は、神のごときアレクサンドロス、ポダレイリオスの血を受けた者』—」(Alex.11)。ベルセウスは母方の血筋とされる (Alex.11)。フォイボスはアポロンの別名であり、アポロンの息子が医神アスクレピオス、アスクレピオスの息子がポダレイリオスである。ポダレイリオスは兄弟とともにトロイ戦争中、ギリシア方の医者であったとされ、各地で医神として祀られた (Caster [1938], p.21; 内田 [2013], 225頁, 註2; Ozanam [2018], p.696)。つまりアレクサンドロスは、自らが医神の系譜を引くと触れ込んだのである。

## 3. 男娼

ルキアノスはまた、アレクサンドロスが少年の頃に男娼をしていたとも述べている。「さて(彼が)まだ少年だった頃、非常に美しかったので、(このことは)面影から推察されるし、また詳しく話してくれる人々の言うことを聞くことも出来るので、(それによると、彼は)悪びれることもなく売春し、金のために求める人々と交わっていた」(Alex.5)。先述したように、ルキアノスは60歳ぐらいのアレクサンドロスに会っているので、容姿に関する記述や「面影」という表現は、ルキアノス自身の目撃証言である。しかしアレクサンドロスが本当に男娼をしていたという確証はない。男娼という言葉は、古代における人格攻撃の常套手段であったから (Caster [1938], p.13; Jones [1986], p.135; Ozanam [2018], p.690)、文字どおりに受け止めることには躊躇する。彼の貴族的な身体と知性は疑いようがないので、本当のところは地元の上流の出であったのかも知れない (Robert [1980], p.411; Jones [1986], p.134; Victor [1997], S.6)。

## 4. 魔術師に弟子入り

男娼に関連して、次の記述は見逃せない。「他の者たちに混じって、ある念者が彼を買っていたが、(その念者は)魔術師 γόης で、魔術 μαγείας や、不思議な呪文 ἐπωδάς や、好きな人に対

する惚れ薬 *χάριτας* や、敵に対する呪縛 *ἐπαγωγὰς* や、宝箱の掘り上げや、地所の相続を引き受けるといった類の者であった」(Alex.5)。つまり、明言はされていないが、ここに挙げられた仕事の内容が魔術パピルスや呪詛板に見られものと一致するので、ここに呪詛板を作ったであろう魔術師が描写されていると考えられる。さらに「この男（魔術師）は、その子（アレクサンドロス）が才能を持ち、自分の仕事に進んで奉仕する気があり、自分がその子の美しさを愛するのに劣らず、自分の悪事を愛しているのを見て取ったので、その子を徹底的に教育し、助手として、下僕として、召使として、使用し続けた」(Alex.5)。つまり、アレクサンドロスは少年の頃に魔術師に弟子入りしたというのである。男娼に関する件は留保するとしても、魔術師への弟子入りは、後の彼の生涯から見て、あり得ることである。

この記述に続いて、師匠についてさらに興味深い証言がある。「あの男（魔術師）は自称、公共の医者 *δημοσία ἰατρός* であり、エジプト人トーンの妻のように、『多くの薬 *φάρμακα* を』熟知していた。（そして）『良いのも調べたし、多くの悪いのも』（調べた）<sup>10</sup>。彼（アレクサンドロス）はこれら全ての相続人かつ継承者となった」(Alex.5)。この記述から、呪詛板を作るようなタイプの魔術師が、表向きは「公共の医者」を名乗っていたこと、そして魔術だけでなく「薬／毒」も処方していたことが分かる。自称医者と言うと、偽医者のように聞こえるが、彼もまたその弟子となったアレクサンドロスも実際には医者であり（Victor [1997], S.4-5, S.135）、裏では魔術をやっていたのだろう。医者が呪詛もやるということは、当時は誰でも知っていた公然の秘密だったのかもしれない。「公共の医者」という言葉は今後、このタイプの魔術師を探す際のキーワードになるだろう。

次に、この男の出身地が明かされる。「あの師匠かつ念者は、祖国はテュアナで、有名なアポロニオスの仲間の一人であった。そして彼の全ての悲劇<sup>11</sup>を知っていた。（私が）君に、どんな学派の出の人間のことを話しているか、分かるよね」(Alex.5)。つまりアレクサンドロスの師匠は、テュアナ出身であり、あの有名なテュアナのアポロニオスの仲間（年齢を考えれば弟子）であったことが分かる（Caster [1938], p.13; Victor [1997], S.5）。テュアナはカッパドキア地方の都市で、アポロニオスは1世紀のピタゴラス派の賢人であり神秘家であった（内田 [2013], 219頁、註5）。アレクサンドロスは、自らをピタゴラスに比肩すると主張しており（Alex.4）、ルキアノスは、テュアナのアポロニオスのことをイカサマ師の親玉の意味で言及しているのである。

## 第2章 遍歴時代（第2階梯／第2類型）

### 1. 旅立ち

さて、独り立ちの時がやってきた。「アレクサンドロスはもう、ヒゲで満たされるようになり、またあのテュアナ人（アレクサンドロスの師匠）も亡くなったので困窮に陥った。同時に生活の糧にしていた美しさの盛りも過ぎたので、もはや小さな企は止めた」(Alex.6)。「小さな企て」

とは、公共の医者の手伝いや呪詛板を作って売るといったことを指しているのだろう。そして彼は旅に出た。旅先で出会った「あるピュザンティオン人と手を組んだ。彼は競技に出場する者たちの合唱歌作者で、全くよりひどい性格だった、—コッコナスと呼ばれていたと思うが—。(彼らは) 遍歴しながら、魔術を見せたり γοητεύοντες, 魔術を使ったり μαγγανεύοντες して『太った奴ら』を、—そのように実際、彼らは魔術師たち μάγων の伝統的な符丁で一般人のことを呼んだのであるが—、欺いたのである」(Alex.6)。二人は、ルキアノスも、プロの専門用語を知っていたようである。γοητεύω も μαγγανεύω も「魔術をする」という意味とともに「人を騙す」という意味も持つ。とりあえず訳し分けたが、意味に違いはないだろう。それから彼らはマケドニアで金持ちのマダム<sup>12)</sup> をカモにするが (Alex.6)、遍歴時代の仕事の詳細は残念ながら書かれていない。彼らはアレクサンドロスの師匠のように、占いや薬を売っていたのだろう (Jones [1986], p.135)。

## 2. デカイ計画

次に彼らは何かデカイことをやろうと、神託所の建設を決意した。まず問題となったのは場所である。「さてコッコナスはカルケドンが適切で好都合な<sup>13)</sup> 場所であると考えた。トラキアにもビテュニアにも近く、アジア<sup>14)</sup> からもガラティアからもまたその上方に住む全ての民族からも遠くなかったからである」(Alex.9)。つまりカルケドンは人や情報の交差点だったのである。「一方、アレクサンドロスは、自分の故郷の方を選び、それは正しかったと言っている。正にそのようなことの始まりと企てのためには、カモになる太ったバカな連中が必要であり、それらがパフラゴニア人であると考えた。(彼らは) アボヌテイコスの上方に住んでおり、大部分が迷信的で金持ち<sup>15)</sup> だった」(Alex.9)<sup>16)</sup>。つまりまず、マーケットリサーチから始めた訳である。建設地に関する考えの違いについてルキアノスは、彼らが不仲になったかのように記述しているが (Alex.10)、むしろ連携プレーと見るべきだろう。つまりコッコナスが人と情報の交差点であるカルケドンで宣伝し、元々マーケットに恵まれたアボヌテイコスにさらに客を呼び込もうとしたのであろう。

## 3. 様々な仕掛け

### 1) 書板の「発見」

神殿のオープンに先立って、彼らは様々な仕掛けをやった。一つは、青銅の書板の「発見」である。カルケドンにある最古のアポロン神殿の聖域に、アポロンとアスクレピオスがアボヌテイコスに移ると書かれた青銅の書板を自分で埋めておいて、後日、自分で「発見」したと触れ回ると、その噂がビテュニアとポントスに広まり、アボヌテイコスにまで伝わると、当地では神殿建設が決議され、基礎工事が始まった (Alex.10)。これは明らかに、顧客の引き抜きである。

## 2) 出で立ちと衣装

もう一つは、アレクサンドロスのそれっぽい出で立ちと衣装である。彼は「今や髪を長く伸ばし、編んだ髪を垂らして、白い縞の入った赤紫の下着を着て、その上に白い上着を羽織り、ペルセウスに倣って鎌を持っていた。彼から自分の母方の系譜が始ったのである」(Alex.11)。ペルセウスはペルシアのアケメネス朝の始祖とされ、アレクサンドロスの出で成ちはペルシア王の衣装を真似たものと考えられている (Victor [1997], S.15; 内田 [2013], 223頁, 註6)。また鎌とは、ペルセウスがゴルゴンの首を切り落とすのに用いたもので、この英雄はシノペ等、黒海沿岸の諸都市で古くから崇拜されていた (Caster [1938], p.21; 内田 [2013], 223頁, 註7)。ポントスのアケメネス朝は、コインにペルセウスを刻印しているので、アレクサンドロスは、自分をポントスのアケメネス朝の諸王に連ねようとしたことになる (Caster [1938], p.21; Victor [1997], S.15)。地域的文脈と整合しているので、この衣装に関する記述も事実に基づくと考えられている (Victor [1997], S.15)。

## 3) シビュラの託宣

判じ物のシビュラの託宣の「発見」(Alex.11)については、面白いが長いので省略するとして、シビュラについては<sup>17)</sup>、ここで言及しておく価値がある。シビュラとは、主にアポロンの神託を告げる巫女たちのことである。元々は小アジアに定住していた女預言者の名前だったが、その権威がギリシア世界中に広まり、さらにはローマ世界にも伝わると、各地にシビュラと所縁のある町が現れた。はじめ各地のシビュラは、同一人物が遍歴したことによって説明されたが、次第に複数のシビュラがいたという解釈に変わった。人数は定かではないが、ウァロは10人を挙げている (*Res Divinae* fr.56a.7)。そうしてこの名前は、アポロンの預言をする巫女たちの総称となった。それで「どこそこのシビュラ」と呼んで区別するようになった。彼女たちは生涯、処女でいなければならず、非常に歳をとっていた。シビュラは、神託所のような制度化された場所にいた巫女ではなく、尋ねられてもいないのに突然、神から靈感を吹き込まれ、狂乱状態に陥って、預言を六脚韻詩の形にして人々の前で歌った。内容は、特に災害に関するものが多かった。これらの預言が『シビュラの手紙』として編纂され、各地に流布した。中でも最も有名なものはキュメのシビュラの預言書である。前6世紀のもので、ギリシアからキュメへもたらされ、ローマ王が購入し、カピトリヌス丘のユピテル神殿の地下に保管され、地震や疫病のたびに、この本から解決法が見出された。前83年に消失した後、各地から同様の預言書が買い集められ、アウグストゥス帝がパラティヌス丘のアポロン神殿に安置したが、これも5世紀初めに消失した。つまりシビュラは、アレクサンドロスと同様にアポロンにつながる預言者であったが、女性であり、見た目もみすぼらしく、また神殿や神官団を持たないが、国家権力に非常に近い距離を持ち得たという意味で、アレクサンドロスとは違ったタイプの預言者の一例として注目される。

## 4) パフォーマンス

さて話を戻して、アレクサンドロスはまた、周到なパフォーマンスも行った。例えば、人々の前で神懸かりを演じて、口から泡を吹いたりしたが、それはサボンソウという噛むと泡の出る植物の根を口に含んでいたのだった (*Alex.12*)。また、例の神殿の基礎工事現場に夜の内に行って、蛇の子を仕込んだダチョウの卵を埋めて、翌日、人々のいる前でそれを「発見」し、割ると中から蛇が出てきて、アスクレピオスが顕現したと大芝居を打ったりもした (*Alex.13-14*)<sup>18)</sup>。

## 5) 呪文

呪文も効果があった。「また彼 (アレクサンドロス) は、ある未知の言葉を唱えると、それらはまるでヘブライ語かフェニキア語のようであったが、人々を驚愕させた。(人々は、彼が) 何を言っているか分からなかったが、ただアポロンとかアスクレピオスとか (の言葉) が混ぜ込まれていることだけは (分かった)」 (*Alex.13*)。この記述は、意味不明の呪文がギリシア語話者にとってどのように聞こえたかを知る上で非常に興味深い記述である。また、分からない言語に少数の分かる言葉を混ぜ込んで分かる言葉を際立たせるという手法は、現代のテレビコマーシャルでも時々見られる。

## 6) 口コミ

これらの仕掛けを総合して、最も大きな力を発揮したのは、口コミであった。「さて (アレクサンドロス) は数日の間、家に留まって期待していたら、まさにそのことが起こった。(それは) 噂 φήμης によって直ちに実に多くのパフラゴニア人たちが馳せ参じて来たということである」 (*Alex.15*)。

## 7) 小道具

アレクサンドロスは小道具も使った。それは人頭の蛇人形である。人の頭は亜麻で作ってあり、取り付けられた馬の毛を引っ張ると、口が開いたり閉じたり、舌が出たり引っ込んだりする仕掛けになっていた (*Alex.12*)。胴は本物の生きた大蛇で、これは以前マケドニアで買ったやつで、その地の大蛇は大人しく、ペットとして飼われていた (*Alex.7*)<sup>19)</sup>。アレクサンドロスは、この人頭の蛇人形を抱いて椅子に座り、薄暗く狭い部屋に客を詰め込み、入口から入ると反対側にある出口からすぐに出て行くようにぞろぞろと客を流した (*Alex.15-16*)。まるで縁日の見世物小屋みたいである。さらにこの蛇にグリュコンという名を付け、アスクレピオスの再来として人々に崇拜させた (*Alex.18*)。するとその神の噂が広まったのみならず、その神の絵や像のお土産などのグッズまでも作って売られるようになった (*Alex.18*)。この記述は、冒頭で述べたように、実際にグリュコンの像が出土している事実と一致する。後にこの蛇人形は、解釈者を介せ



ず、神が直接に喋って託宣を下す「直々のお告げ」と称する金持ち向けの託宣になったが、実際には鶴の気管をつなぎ合わせたパイプを頭に通して、後ろから係の者が喋って託宣を下すという仕組みになっていた (*Alex.26*)<sup>20)</sup>。

### 第3章 神託所経営（第3階梯／第3類型）

#### 1. 神託のやり方

このようにして前評判が整い、いよいよ神託所がオープンした。アレクサンドロスは、神託のやり方について、ギリキア地方のマロス市にあるアムフィロコスの神託所をモデルにした (*Alex.19*)。アムフィロコスは、アンフィアラオスの息子で、父と同様、予言を得意とし、マロス市に創設した神託所は当時、デルフォイの神託所を凌ぐほどの人気があったという（内田 [2013], 233頁, 註1）。オロボスのアンフィアラオスは、アスクレピオスをモデルとした癒しの神であった (*OCD*<sup>3</sup> [1996], *Amphiaraus*, p.75)。アレクサンドロスの神託は、次のようなやり方で行われた。「アレクサンドロスは、やって来た全ての者たちに、神が予言するであろうと予め告げ、所定の日を前もって言った。そして各人に、自分が求めることや最も知りたいことを書き物 βιβλίον に書き込んで紐で縛り、ロウか粘土かその他そのようなもので封印するよう命じた。彼はそれらの書き物 βιβλία を持って至聖所に降り、・・・提出した者たちを順番に伝令と神官に呼びに行かせると、一つ一つのことを神から聴いて、書き物 βιβλίον を元のまま封印された状態で返却し、それに対する返答、つまりある人が尋ねたことに関して神と交わした言葉に対する返答が、下に書き添えられることになっていた」 (*Alex.19*)。βιβλίον<sup>21)</sup>とは、おそらくパピルスの巻物ではなく、1枚のシートであろう。それに知りたいことを簡潔に書いて、手紙のように折って紐で縛り<sup>22)</sup>、縛り口を粘土かロウで封印したものであろう。つまりアレクサンドロスは、書き物を提出してから日にちがあるので、その間に封印を破り、質問を読んで回答を書き加え、元の通りに封印して返却したのである。

#### 2. 料金

料金は以下の通り。「料金は1神託 χρησιμῶ に付き1ドラクマ2オボロスと設定されていた。小さなものだと思わないように、友よ、またその収入も少なくない、年収7から8万（ドラクマ）<sup>23)</sup>を稼いだのだ。というのも人々は、一人が10から15神託 χρησιμους ずつ何うほど貪欲だったからだ」 (*Alex.23*)。1ドラクマ2オボロスは8オボロスである。前420年にファセリス人がディスカウント価格としてデルフォイの神託に支払った金額は4オボロス、前370年にスキアトス人が優待価格として支払った額は2オボロス、トラヤヌスの時代のエフェソスで380gのパンの金額は2オボロス、220年頃には4オボロス、ルキアノスの時代の日雇い労働者の日当は4オボロス、サンダルは7オボロスであった (*Victor* [1997], S.147-148; cf. *Harmon* [1925], p.206,

n.1; 内田 [2013], 237頁, 註2)。またマロスにあるアムフィアオスの神託所の料金は2オボロスであった (*Alex.19*) (Harmon [1925], p.206, n.1)。さらにリバニオス『假想演説集』34.49によれば, アポロンの神託は1オボロスであった (内田 [2013], 233頁, 註3)。

### 3. 予言のカラクリ

次にルキアノスは, アレクサンドロスの予言の様々なカラクリを暴いている。例えば, 封印された書き物を盗み読む手口 (*Alex.20-21*)<sup>24)</sup>, 予言はどのようにも解釈できるように曖昧な返答で行う (*Alex.22*), ハズレの予言を削除しアタリと差し替える (*Alex.27*), もう一つ別な予言を初めから用意しておく (*Alex.28*), 難しい伺いに対しては返答を先延ばしにする (*Alex.22*) である。

### 4. 薬の処方

アレクサンドロスは薬も処方した。「また別の人々には治療や食事療法を処方した。私がおはじめに言ったことだが, (彼は) 多くの有用な薬 φάρμακα を知っていたからだ。特に彼のところで評判が良かったのはキュトミデス<sup>25)</sup> で, でっち上げられた疲労回復薬<sup>26)</sup> の名前であるが, 熊の脂肪から作られていた」 (*Alex.22*)。

### 5. 経営戦略

#### 1) 組織経営

次に, アレクサンドロスの経営戦略について見よう。まず, 彼の神託所は組織経営がなされていた。彼は上述した収入を「受け取ったが, 自分だけで使ったのではなく, また富を積み上げたのでもなく, 多くの者たちを既に自分の周りに抱えており, 助手たち συνεργούς, 下働きたち ύπηρέτας, スパイたち πειθήνας, 神託作成係りたち χρησιμοποιούς, 神託保管係りたち χρησιμοφύλακας, 書記たち ύπογραφέας, 封印係りたち έπισφραγιστάς, そして神託解釈者たち έξηγητάς, 皆それぞれに相応しい報酬を分配した」 (*Alex.23*)。

#### 2) 広報活動

また, 広報活動にも余念がなかった。アレクサンドロスは「既にある者たちを外国へも (何度) も送り出した。(彼らは, 彼の) 神託 μαντείου に関する噂 φήμας を作り上げ, 諸民族に詳しく語った。すなわち (彼は)<sup>27)</sup> 予言した προείποι とか, 逃亡奴隷を見つけ出したとか, 泥棒や盗賊を言い当てたとか, 宝箱の掘り出しが出来たとか, 病人を癒したとか, はたまた何人かの死人を生き返らせたというのであった」 (*Alex.24*)。「死人を生き返らせた」というのは, まるでイエスを彷彿とさせる。

### 3) 神託伝達者

さらにアレクサンドロスは、各地に神託伝達者を派遣した。「彼は、ひとたびイタリアの事どもを手に入れると、より大きなことを常に考え、ローマ帝国の至る所に神託伝達者たち χρησμολόγους を派遣して、諸都市に疫病や火災や地震に用心するよう警告した。そしてこれらのうちの何も起こらないよう、彼自身が安全に救うであろうと約束した。ある一つの神託 χρησμόν を、これも直々のお告げ αυτόφωνον であったが、あの疫病が流行っている時に、全ての民族に送った。そのお告げ ἔπος は、『髪切らざるフォイボス、疫病の雲を遠ざげん』というものであった。このお告げは、疫病除けのおまじない τοῦ λοιμοῦ ἀλεξιφάρμακον として、門の上にかかれていたのが至る所で見られた」(Alex.36)。「あの疫病」とは、パルティア遠征軍が持ち帰ったペストのことで、165-168年にかけてローマ市を含む帝国一体で流行った (Harmon [1925], p.223, n.1; Caster [1938], p.58-61; 内田 [2013], 247頁, 註 5; Regius [2017], p.74; Ozanam [2018], p.707, n.2)。この時期、マルクス・アウレリウス帝は奇妙な儀式と神官たちに頼らざるを得ず、狂信家たちは世界の終焉を予言したという (Jones [1986], p.142)。時代背景を考えると、単なる靈感商法とも言えない。

### 4) スパイ

またアレクサンドロスは、スパイも派遣した。「確かにローマ市の中にさえ、共謀者たちからなる実に多くのスパイたち πυθῆνας を置いた。彼らは個々人の考えを彼に報告し、彼らの質問、特に(彼らが) 願い求めていることを予め知らせた。その結果、彼(アレクサンドロス)は(神託を伺うために)送られて来た者たちが(彼の神託所に)到着する前に、返事の準備が整っているということになるのである」(Alex.37)。

### 5) アウトソーシング

アレクサンドロスの神託所が大評判となり客が押し寄せるようになると、客を捌ききれなくなったので、「夜の託宣」という方法を考えついた。それは客が提出したたくさんの書き物 βιβλία を敷いて、その上で眠ると神のお告げがあって、それを答えとして書き付けたのであるが、あまりにもいい加減だったので、誰にも理解できなかった。そこで「そのために置かれた何人かの神託解釈者たち ἐξηγηταί がいて、少なからぬ料金を、そのような神託 χρησμούς を受け取った者たちから、それらの解釈と分析の代金として徴収していた。そして彼らのこの仕事は有料であった。つまり実際、神託解釈者たち ἐξηγηταί は、めいめいアレクサンドロスに1アッティカ・タラントンを支払っていたのだ」(Alex.49)。一種のアウトソーシングではあるが、解釈者たちは神託伺い料を受け取り、その内の大きなパーセンテージをアレクサンドロスにキックバックしていたのだろう。

## 6) 国際化

神託所の国際化も進んでいた。アレクサンドロスは「また外国人にもしばしば神託を行ったが ἔχρησεν, もしある者がシリア語とかケルト語とか彼の祖国の言葉で質問して, 質問者と同族の者で異邦人としてこちらに来ている者たちを容易に見つけることが出来なかった場合には<sup>28)</sup>, そのために書き物 βιβλίων の提出と神託 χρησμοῦδίας の間の時間が長かったので, その結果, その間に時間をかけて神託 χρησμοί (の封印) が安全に解かれ, 個々 (の質問) を翻訳できる者が見つけられたのである」(Alex.51(52))<sup>29)</sup>。

## 6. 横の繋がり

どうも, 同業者どうしの横の繋がりがあったようである。アレクサンドロスは「クラロスやディデュマやマロスの者たち (つまり神官たち) 自身が, これと同じ予言 μαντικῆ で有名であることを知っていたので, 彼らを友人とし, (アレクサンドロスの神託所に) やって来た客の多くを, 彼らのところに送った」(Alex.29)。これも一種のアウトソーシングであろうか, それとも客を回してやるという便宜だろうか。この文章は, 神託所の横の繋がりと同時に, 古来有名な神託所でもアレクサンドロスの神託所と同様の仕事が行われていたことを暗示している。

## 第4章 有力者のお抱え魔術師 (第4階梯／第4類型)

### 1. 噂はローマに

やがてアレクサンドロスの噂はローマにまで広がり, 彼の神託は特に上流階級で人気を博した。「以上のことは, イオニア, キリキア, パフラゴニア, そしてガラティアまでの限られた地域内でのことであった。一方, 彼の神託 μαντείου の評判 κλέος がイタリアにまで広まり, さらにローマ市にまで聞こえてくるようになった時, 我先に (その神託を) 求めない者はいなかった。ある者たちは自分で (神託所を) 訪れ, 他の者たちは (代理人を) 派遣した。そして特に最も有力で, その都市において最高の地位を有する者たちが (そうした)」(Alex.30)。

### 2. 高官ルティリアヌス

そして「彼らの筆頭であり先頭に立ったのがルティリアヌスであった。この男は, 他の点においては美にして善なる者であり, 多くのローマの官職を歴任した者であるが, 神々のことについては全く病的であり, 神々に関する尋常でない事ごとを信じた」(Alex.30)<sup>30)</sup>。このルティリアヌスは P. Mummius Sisenna Rutilianus のことで, 彼の故郷は南スペイン, ガルバ帝の母の父を出したことが注目される。また同名の父はブリテン属州総督であった。彼が当時, 何の官職に就いていたかは不明であるが, 146年に執政官代理 consul suffectus, 上モエシア属州総督 Legatus pro praetore, 170年頃にアジア属州知事 proconsul を勤め, (Caster [1938], p.52-54; Harmon

[1925] p.214-215, n.2; 内田 [2013], 217頁, 註6; Regius [2017], p.72; Ozanam [2018], p.692, n.6), 全ての高職歴 *cursus honorum* を経験し, 60歳の時にアレクサンドロスの娘と結婚した (*Alex.35*)。

### 3. 伝言ゲーム

ルティリアヌスは自分でアボヌテイコスには行っていないが, 代わりに代理人を派遣した。その代理人は無知な下僕たちだったので, 神託所から帰ってくると, 主人に気に入られようと, 自分が見聞きしたことに尾ひれを付けて, 主人が聞きたがるようなことを伝えた。すると今度は, 不確かな情報しか持っていない迷信家ルティリアヌスが情報の発信源となった (*Alex.30*)。「彼は, 非常に多くの有力者たちと友人であったので, あちこちを歩き回って, 一方では派遣された者たちから聞いたことを詳しく話したり, 他方では自分から付け加えたりした。そうやって彼は, その都市（ローマの好奇心）に火を付け, 震撼させ, 宮廷にいる者たちの内の多くを興奮させた。すると間もなく彼ら自身が, 自分に関わる何かを尋ねたいと切望した」 (*Alex.31*)。

### 4. 脅迫

上層階級が最も知りたかったことについてルキアノスは, 読者であるケルソスに向かって次のように暗示している。アレクサンドロスは「実際に, 送られて来た書き物 *βιβλία* (の封印) を解いて読んで, 質問の中に何か危険で冒険的なものを見つけると, 彼は (それを) 引き止めて返さなかった。恐怖によって, その (質問の) 送り手たちを掌中に収め, 奴隷のようにするためであった。(彼らに) 自分が質問したことがどんなことであったかを思い出させるからである。金持ちで大きな力を持った人々が尋ねる質問に, どんなことがふさわしいか (君には) 分かるよね」 (*Alex.32*)。その質問とは, 次に誰が皇帝になるかということを示していると考えられている (内田 [2013], 245頁, 註1)。アンミアヌスの記述によれば, そのような質問は罪に問われる行為だとされた<sup>31)</sup>。つまりアレクサンドロスは, この手の質問を脅迫のネタに利用したのである。

### 5. 皇帝との交友

今やアレクサンドロスは「高く評価されているルティリアヌスとの関係のおかげで, 少なからず王権や宮廷に影響力を持った」 (*Alex.48*) ので, 時の皇帝マルクス・アウレリウスに「ゲルマニアでの戦争<sup>32)</sup>に関する神託 *χρησμών* を送った」 (*Alex.48*)。おそらく167年か168年のことであろう (Cumont [1887], p.54)。またアレクサンドロスは「皇帝に, アボヌテイコスという都市の名を改名してイオノポリスと呼ばれること, そして新しいコインを打ち出すことを願い出た……。 (そのコインの) 片面には, グリュコン (の像) が, もう片面には, 祖父アスクレピオスの冠と母方の祖先バルセウスのあの鎌を持ったアレクサンドロス (の像) が刻印されてい

た」(*Alex.58*)。実際に「イオノポリス人たちの」ΙΩΝΟΠΟΛΕΙΤΩΝと「グリュコン」ΓΛΥΚΩΝという銘があり、人頭の蛇が刻印された3世紀中頃のコインが出土している(Talbot [1857], p.461, n.1; Harmon [1925] p.250-251, n.1; 内田 [2013], 213頁, 註2)。しかしルキアノスが描写したようなアレクサンドロス自身が刻印されたコインはまだ発見されていない(Robert [1980], 408-411; Jones [1986], p.146; Victor [1997], S.170; Regius [2017], p.118)。

## 第5章 アレクサンドロスの敵

### 1. キリスト教徒とエピクロス派

皇帝権力に接近したアレクサンドロスの敵は、キリスト教徒とエピクロス派であった。アレクサンドロスはアテナイのエレウシスの秘儀を模した儀式を創設して、その儀式の場で次のように布告した。「『もし何者か無神論者 ἄθεος, あるいはキリスト教徒 Χριστιανός, あるいはエピクロス派 Ἐπικούρειος が、秘儀のスパイとして(ここに)来ているならば逃げるがよい。この神(グリュコン)を信じる者たちは神助によりて秘儀に入信させよ』。それからまず追放(の儀式)が行われた。彼が先導して『キリスト教徒を追い出せ』と言うと、全ての会衆が『エピクロス派を追い出せ』と声を合わせた」(*Alex.38*)。アレクサンドロスは「エピクロスを・・・自分のペテン／魔術 (μαγανείας)の競争相手、また(それに)対抗する賢者として、本当に恐れたていた」(*Alex.43*)のである。

### 2. グルの命令

それゆえにアレクサンドロスは、エピクロス派に対して暴力的であり、自身の信者に対してカルト教団のグルのように振る舞った。あるエピクロス派が彼のまやかしを非難した時、アレクサンドロスは「取り巻きたちに、彼に石を投げつけよ、さもなければ、お前らも穢れ、エピクロス派 Ἐπικουρείους と呼ばれることになるぞと命じた」(*Alex.45*)。もしアレクサンドロスの意にそぐわない者がいたら「そのような者を、もはや誰も家に入れなかったし、火も水も貸してやらなかった。(その者は)不敬な者、無神論者 ἄθεον, そしてエピクロス派 Ἐπικούρειον として、これこそが最も強い罵倒であったが、土地から土地へ追い立てられなければならなかった」(*Alex.46*)。またアレクサンドロスは次のような布告を出した。「ポントス地方は無神論者 ἄθεων とキリスト教徒 Χριστιανῶν で満たされている。彼らは自分について最もひどい冒涇を敢行している。この神(グリュコン)を慈悲深いままに保ちたいなら、彼らを石でもって追放せよと命じた」(*Alex.25*)。

### 3. 人間の真理

アレクサンドロスは、エピクロスの弟子たちが師匠の教義をまとめた『主要教説』 κύρια

δόξαι という本を燃やしたが、このことをルキアノスは強く根に持っていた (*Alex.47*)。アレクサンドロスは「あの書物 βιβλίον が（それに）出会った人々にとって、どれほど多くの幸福の源となったかということを知らなかったのだ。また彼らの（心の）中に、どれほど多くの平和や精神の安定 ἀταραξίαν や自由を作り出したかということも。（あの書物は）恐れ、幻影、前兆、そして虚しい希望、過度な願望から（人々を）解放し、理性や真実を（人々の心の）中に生み出し、最も真に心を浄めたのだ。松明<sup>33</sup> や海藻<sup>34</sup> やそのようなたわいも無いものによってではなく、正しい言葉や真実や言論の自由によってである」 (*Alex.47*)。松明や海藻は魔術の小道具である。

一方、アレクサンドロスも人間の真理を見抜いていた。ただし彼は、それを金儲けに利用したのである。アレクサンドロスとコッコナスは「人間の生活が、次の二つの暴君、つまり希望と恐怖<sup>35</sup> によって支配されているということ、またこれらのうちの両方をタイミングよく利用することが出来る者は、たちまち金持ちになれるだろうということも簡単に悟った。というのも（彼らは）、恐怖している者も希望を持っている者も、その両方にとって、予知は最も欠くべからざるものであり、最も求められるものであると見抜いたからである。デルフォイもこのようにして昔から裕福になり有名になったのである。デロスもクラロスもブランキダイも（そうである）。人々は常に、先に言及した暴君たち、つまり希望と恐怖のゆえに、神域を頻繁に訪れ、これから起こることを前もって知ることを求め、またそれゆえに盛大な犠牲獣を捧げ、黄金の延べ板を奉納したのである」 (*Alex.8*)。デルフォイ、デロス、クラロス、ブランキダイ（ディデュマ）は、いずれも有名なアポロンの神託所である (Caster, [1938], p.51-52; Ozanam [2018], p.695, n.1)。

#### 4. 直接対決

ルキアノスはアレクサンドロスを試し (*Alex.53-54*)、彼と直接会って対決した (*Alex.55*)。その結果、ルキアノスは彼の息のかかった者によって暗殺されそうになり (*Alex.56-57*)<sup>36</sup>、エピクロス派の同志とともに復讐を計画した (*Alex.57*)。当時、アマストリスとポントス・ヘラクレイアにエピクロス派の根拠地があった (Jones [1986], p.140)。「しかし、当時のビテュニア及びポントス属州総督アウイトゥスは（復讐を）止めるよう、ほとんど嘆願し懇願せんばかりに（私を）引き止めた。というのは、ルティリアヌスに対する懇意のゆえに、たとえ明らかに（彼の）不正を押さえたとしても、彼を罰することは不可能だろうから」 (*Alex.57*)。アウイトゥスは L. Lollianus Avitus のことで、144年に執政官 consul ordinarius、156年頃にアフリカ属州知事 Proconsul、165/6年にビテュニアおよびポントス属州総督 legatus pro praetore を歴任した人物である (Harmon [1925], p.249, n.3; Caster [1938], p.76; Victor [1997], S.169; 内田 [2013], 265頁、註5)。結局、ルキアノスは引き下がったが、アレクサンドロスの影響力は絶大であった。

## 5. 後継者

アレクサンドロスは、自分の予言に反して70歳にもならないうちに死亡し (*Alex*.59)、彼の神託所の後継者争いが起こって、ルティリアヌスが仲裁することとなったが、後継者候補の中にパイトスという医者 *ιατρος* もいたというが (*Alex*.60)、この人物については不明である (内田 [2013], 267頁, 註2)。テュアナのアポロニオス、アレクサンドロスの師匠、アレクサンドロス、そしてパイトスと続く医者の系譜は、アボヌテイコスがパフラゴニア地方およびポントス地方における医療の中心地であったことを連想させる (Caster [1938], p.14; Jones [1986], p.147; Victor [1997], S.5; Regius [2017], p.118)。この神託所は、その後も150年間ほど存続した。

## 第6章 時代背景

### 1. 伝統宗教のリバイバル (グリュコン崇拝)

アレクサンドロスが創設したグリュコン崇拝は、よく言われるような「新宗教」の創設ではなく、アレンジを加えつつも、大局的に見れば、むしろ伝統的なアスクレピオス崇拝のリバイバルであった。プルタルコスの『神託の衰微について』に見られるように、伝統宗教は一時期衰退したが、小プリニウスの書簡に「今までほとんど荒れ果てていた諸神殿が参拝され始め、長い間中断していた恒例の儀式も再開され、また至る所で犠牲獣の肉が売られるようになりました。その買い手は今まで滅多に見られなかったのに」(Plin. *Ep.*10.96) とあり、2世紀初頭には伝統宗教復活の兆しがあった。その延長線上にハドリアヌス帝 (在位: 117-138年) の伝統文化保護政策があり、新アスクレピオス崇拝の成功は、その波に乗ったものであった (内田 [2013], 331頁)。しかし復活した伝統宗教は、せいぜい100年間しか続かなかった (Caster [1937], p.225-226)。

アレクサンドロスに対するルキアノスの非難は、人間を支配する二つの暴君、すなわち過度な希望と恐怖から人間を救うために、アレクサンドロスが神 (グリュコン) を創り出し、それにさせることによって金儲けをしたことに向けられている。ルキアノスは、その神の虚構を暴くために多くの紙面を費やした反面、アレクサンドロスの神託所で実際に行われたであろう医療行為の実態については、ほとんど語らなかった。この点是不公平のそしりを免れないだろう。また予言は単なるベテンではなく、心の癒しでもあったはずである。それ故に古来、神託所は栄えたのであり、人々はそれを必要としたのである。

アスクレピオスは治癒神として、伝統的な神々の中で最後までキリスト教と張り合った神である (Victor [1997], S.156)。そもそもアスクレピオスとキリストには、表面的に似た特徴があり、これが対立の一因となった。つまり両者ともに同じように殉教者の救い手であり、また同じように神と人間の母の間に生まれた息子であった (Victor [1997], S.155-156)。そして何より両者は本質的に治癒神であり、地中海世界における首座を巡って激しく競合した (山形 [2010]a, p.166-190; 山形 [2010]b, p.20-59)。



## 2. 新興宗教の興隆（キリスト教）

30年頃にイエスが処刑され、その後イエスをキリストとする教団が誕生し、パウロを中心として宣教が行われた。この最初の数十年間、キリスト教徒はローマ帝国にとって問題となる存在ではなく、ローマ官憲はキリスト教徒に対する敵ではなかった（『キリスト教史1』[1908], 179頁）。またこの時期、外から見れば、ユダヤ人とキリスト教徒の区別は付かなかった（『キリスト教史1』[1908], 185頁）。

ネロ帝による第一迫害（64年）、ドミティアヌス帝による第二迫害（94-95年）の後、アントニヌス朝は緊張緩和の時代であった（『キリスト教史1』[1908], 186頁）。ポントス及びビテュニア地方には、1世紀後半からキリスト教徒がいたが（1. Petr.1.1; Acts.2.9）、トラヤヌス帝（在位：98-117）の時、ビテュニア属州総督プリニウスがキリスト教徒の扱いについて皇帝に問い合わせた書簡が残されている。これは111年秋に彼がアマストリスで巡回裁判を行った際に書かれたものである（國原 [1999], 440頁, 註76）。プリニウスの伝えるところによれば、「多くの者たち、あらゆる年齢の、あらゆる階層の、男も女も、危険な状態に導かれており、また導かれるでしょう。町々のみならず、村々にもさらに田舎までにも、その迷信の汚染が広がっているのです *superstitionis istius contagio pervagata est*」（Plin. *Ep.*10.96）といい、キリスト教の興隆ぶりが窺える。一方、キリスト教徒は犯罪行為によってではなく、キリスト教徒という「名」によって告発されたが、嫌疑者に対するプリニウスの態度は穏便であり、無署名の密告書の扱いについて、皇帝は無視せよと命じ、積極的なキリスト教徒の摘発も禁じているから、当時のキリスト教徒に対するローマ帝国の態度は総じて穏健であった。キリスト教徒はむしろ異教徒やユダヤ教徒によって攻撃を受けていたのである（『キリスト教史1』[1980], 188頁）。このような状況は2世紀全般を通じて続いた（『キリスト教史1』[1980], 188頁）。

アントニヌス・ピウス帝（在位：138-161年）の頃、次第に異教徒はキリスト教徒の独自性を認識するようになった（『キリスト教史1』[1980], 191頁）。異教徒にとってのキリスト教徒のイメージは、社会の周辺に位置し、東方の秘教を信奉し、魔術的な力を持つ不穏な存在、いかがわしい習慣を持ち（ロバの頭を崇拜する、子供を犠牲に捧げて食べる、近親相姦を行う）、軽蔑すべき人々といったものであった（『キリスト教史1』[1980], 191-192頁）。

マルクス・アウレリウス帝（在位：161-180年）の時、異教徒哲学者ケルソスが『真理の言葉』を書いてキリスト教を徹底的に攻撃したが、このことはキリスト教徒の側にも強力な理論家が存在したことを前提としており、もはやキリスト教徒が単に迷信に取り憑かれたマージナルな人々などではなく、社会的に無視できない存在に成長したことを示している（『キリスト教史1』[1980], 194頁）。この時期、アマストリスにキリスト教会があったことが分かっている（Jones [1986], p.140）。アレクサンドロスがキリスト教を批判したのは、まさにこのような時代においてであった。

### 3. 哲学の老舗（エピクロス派）

エピクロスは前341年にサモス島で生まれたアテナイ人で、哲学諸派を学んだ後、前305年にアテナイで小さな庭園を購入して学校を開いた（岩崎 [1994], 105-106頁）。この学校はプラトンやアリストテレスの研究センターとは異なり、彼の教説を求心力として結集した共同体であり、大人、子供、老若男女が訪れ、都市から孤立していた（セドレー [2009], 229頁）。エピクロスは生徒に対して神的指導者であり、神的救世主として崇められた（セドレー [2009], 228頁）。つまりエピクロスは教祖、彼の学校は教団だったのである。

ヘレニズム時代の哲学は、エピクロスの箴言「隠れて生きよ」に代表されるように、万物の根源を探求することでもなければ、よりよく生きるためにどのようなポリスを作るべきかでもなく、ポリスなどの煩わしいことから身を遠ざけ、心身の健康と平静の達成を目的とした（岩崎 [1994], 106頁）。つまり個人的な幸福の追求こそが、この時期の哲学のテーマであり、それはローマ時代にも引き継がれた（セドレー [2009], 224頁）。セドレーの言を借りれば「さながら感情面の治療のために客が哲学学校に列をなし、即効薬を期待しているかのようであった」（セドレー [2009], 224頁）。

エピクロスの箴言集『主要教説』の冒頭4項目は、凝縮されて『テトラバルマコス（四部からなる療法）』と呼ばれ、神や死を恐れず、快や苦の限界を知れという内容である（セドレー [2009], 230頁）。つまり、アレクサンドロスが金儲けのネタにした虚しい希望や恐怖（つまり臆見）を、神に頼るのでなく、自らの力で追ひ払う術を身につけること、これがエピクロス派の目的であり、それによって得られた心の平静が「アタラクシア」（不動心）である。2世紀に復活した神託は本質的に神の摂理による癒しであったので、エピクロス派はそれに反対した（Caster [1937], p.227）。エピクロス派のシンパであるルキアノスも同様の態度を示した。

一方、ルキアノスは別の作品『ペレグリノスの昇天』で、キリスト教徒を詐欺師ペレグリノスによって欺かれた単純な人たちとして描いている（Caster [1937], p.350; 『キリスト教史1』 [1980], 193頁）。ルキアノスは、宗教に没頭する限りにおいて、キリスト教徒を軽蔑していた（Caster [1937], p.352）。というのもキリスト教徒は死を恐れず、自ら拷問に身を任せ、死を迎えに行きたがりさえするのは、彼らが不死を確信していたからであるが、ルキアノスから見れば、彼らは過度の希望の犠牲になった狂信家に見えたからである（Caster [1937], p.352）。確かに彼は、キリスト教の教義を理解していなかったが<sup>37)</sup>、同様の態度は、後に書かれた『偽預言者アレクサンドロス』にも言外に示されている（Caster [1937], p.352; Betz, [1959], S.235-237; Ozanam [2018], p.690）。結局ルキアノスの目から見れば、アレクサンドロスの信者もキリスト教徒も、神を狂信して過度の希望と恐怖の犠牲者になった者として、変わりがなかったのである。

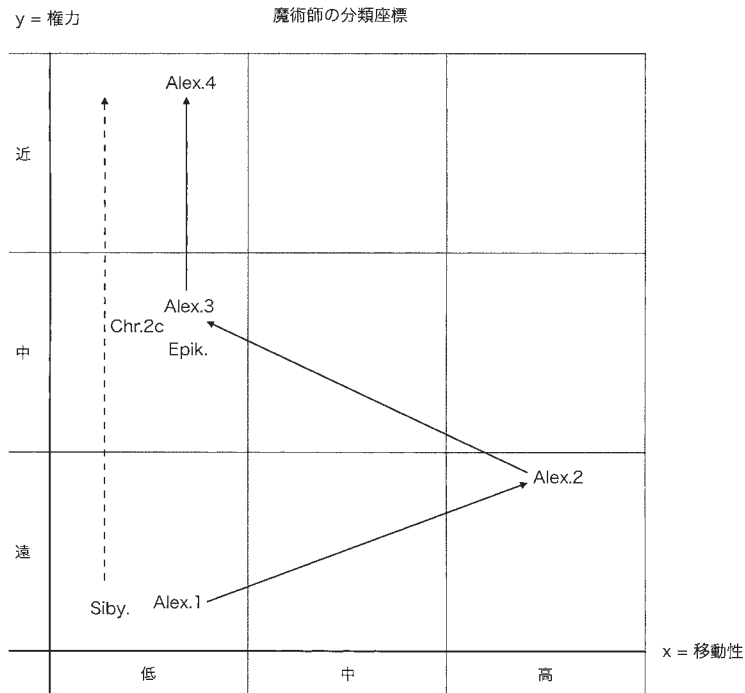
#### 4. 三つ巴

まとめると、リバイバルした伝統宗教グリコン崇拜、赤丸急上昇中の新興宗教キリスト教、そして哲学の老舗エピクロス派、これら三者はいずれも人々の心身の癒しを追求する宗教であり、ただその方法が異なっていた。『偽預言者アレクサンドロス』を歴史的背景に嵌め込むと、これら三者が生き残りをかけて競合していた構図が見えてくる。

#### おわりに

以上の考察を踏まえて、小論の目的である、古代地中海世界における様々な魔術師の分類座標を構築するならば、縦軸 Y を「権力との距離の遠近」、横軸 X を「移動性の高低」に取るのが最も適当であるように思われる。具体的には図に示した通りである。階梯／類型①の「徒弟」においては、町医者（裏の顔は魔術師）に仕えていたので、権力との距離は遠く、移動性も低かった。階梯／類型②の「遍歴魔術師」になると、有力者のマダムに取り入ろうとしたことから、権力との距離は少し近くなり、移動性は著しく高くなった。階梯／類型③の「神託所経営者」では、権力との距離は益々近くなる一方、移動性は低下し固定された。階梯／類型④の「有力者のお抱え魔術師」ともなると、高官や皇帝との交友ができ、権力との距離は最接近する。以上が、アレクサンドロスのサクセスストーリーを基にした階梯／類型の変位である。2世紀のキリスト教とエピクロス派は、神託所経営以降のアレクサンドロスの座標と近く、互いに競合していたことが分かる。またシビュレは移動性は低いが、中には国家権力に直結する者もいた。

呪詛板を製造販売するタイプの魔術師の主流はおそらく、アレクサンドロスの師匠のように、町医者として一定期間ある町に定住するものの、数年たつと新たな職場を求めて移動するような階梯／類型②の「遍歴魔術師」であろう。この分類座標は今後、古代地中海世界にいた他の様々なタイプの魔術師を分類整理する上で有効に機能するだろう。



Alex.1 : アレクサンドロス / 徒弟時代  
 Alex.2 : アレクサンドロス / 遍歴時代  
 Alex.3 : アレクサンドロス / 神託所経営者  
 Alex.4 : アレクサンドロス / 有力者のお抱え  
 Siby. : シビュレ  
 Chr.2c : 2世紀のキリスト教  
 Epik. : エピクロス派

## 参考文献

- Betz, H. D., Lukian von Samosata und das Christentum, *Novum Testamentum*, vol.3, Fasc.3, [1959], S.226-237.
- Caster, M., *Lucien et la pensée religieuse de son temps*, Paris, Les Belles Lettres, [1937].
- Caster, M., *Études sur Alexandre ou le faux prophète de Lucien*, Paris, Les Belles Lettres, [1938]
- Cumont, F., *Alexandre d'Abonotichos, un épisode de l'histoire du paganisme au IIe siècle de notre ère*, Mémoires couronnées de l'académie royale des sciences et belles-lettres de Belgique, vol.xl, [1887], p.3-54.

- Fischer, Theodor, *Lucian* II, Alexander oder Der Lügenprophet, Langenscheidtsche Bibliothek, Berlin-Schöneberg, Ndr., [ca.1900], S.22-51.
- Harmon, A. H., *Lucian* IV, Alexander the False Prophet, Loeb Classical Library, [1925], p.173-253.
- Jones, C. P., *Culture and Society in Lucien*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London, [1986].
- Macleod, M. D., *Luciani Opera*, Tomus II, 42. Ἀλέξανδρος ἢ Ψευδόμαντις, Oxford Classical Texts, Oxonii, [1974], p.331-359.
- Landfester, Manfred, Lukianos [1] aus Samosata, *DNP*, Suppl.2, [2007], S.378-382.
- Ozanam, Anne-Marie, *Lucien, œuvres complètes*, Paris, Les Belles Lettres, [2018], p.689-718.
- Rabe, Hugo, *Scholia in Lucianum; adiectae sunt II tabulae phototype*, Teubner, Praefatio p.iii-ix, 42. Ἀλέξανδρος, [1906], p.180-185.
- Regius, Codex, *Lucian vs. the False Prophete: Translation and Annotations*, Wiesbaden / Ljubljana, [2017].
- Riess, 70) Alexandros aus Abonuteichos, *RE*, Bd.1-2, [1894], K.1444-1445.
- Robert, L., *À travers l'Asie Mineure: poètes et prosateurs, Monnaies grecques, voyageurs et géographie*, [1980], p.393-436.
- Siegel, D., 27) Alexandros aus Abonuteichos, *DNP*, Bd.1, [1996], K.482-483.
- Talbot, E., *Œuvres complètes de Lucien de Samosate*, Paris, [1857], p.453-477.
- Victor, Ulrich, *Lukian von Samosata - Alexandros oder der Lügenprophet*, Brill, [1997].
- Weinreich, O., Alexandros der Lügenprophet und seine Stellung in der Religiosität des II. Jahrhunderts n. Chr, hrg. Johannes Ilberg, *Neue Jahrbücher für das klassische Altertum Geschichte und deutsche Literatur und Pädagogik*, Bd.47-48, 4.Heft, Teubner, Leipzig und Berlin, [1921], S.129-151. = Weinreich, O., *Ausgewählte Schriften*, I, [1969], S.520-551.
- 出村みや子「オリゲネス『ケルソス駁論』における真理探究の構造—エンキュリデス・パイデアの検討を中心にして—」『中世思想研究』30, [1988], 45-61頁。
- 岩崎允胤『要説西洋古代哲学史』大阪経済法科大学出版部, [1994]。
- 内田次信訳「偽預言者アレクサンドロス（第42篇）」, ルキアノス『偽預言者アレクサンドロス全集4』内田次信／戸高和弘／渡辺浩司訳, 西洋古典叢書, [2013], 211-267頁。
- 高津春繁訳「偽預言者アレクサンドロス」『ペレグリーノスの昇天』東京堂, [1947], 87-164頁。
- 高津春繁訳「ペレグリーノスの昇天」『ペレグリーノスの昇天』東京堂, [1947], 165-221頁。
- 国際ギデオン協会『新約聖書』[1975]。
- 國原吉之助訳『プリニウス書簡集』講談社学術文庫, [1993]。

セドレー, D 『古代ギリシア・ローマの哲学, ケンブリッジ・コンパニオン』 京都大学学術出版  
会, [2009]。

ダニエル, J 『キリスト教史1, 初代教会』 上智大学中世思想研究所編訳/監修, 講談社出版  
研究所, [1980]。

ブルタルコス 『モラリア5』 丸橋裕訳, 西洋古典叢書 [2009], 235-333頁。

山形孝夫 『聖書の起源』 ちくま学術文庫 [2010]a (初版 [1976]) 「イエスとアスクレピオスの競  
合と葛藤」, 166-190頁。

山形孝夫 『治癒神イエスの誕生』 ちくま学術文庫 [2010]b (改訂増補版 [1987], 初版 [1981])  
「治癒神イエスとイエスの運動—治癒神アスクレピオスとの競合と葛藤—」, 20-59頁。

## 註

- 1) サモサタのルキアノスは, ローマ帝政期における重要なギリシア人の修辞学者, 風刺作家,  
著述家で, 約80編の作品が残っている。サモサタはエウフラテス河畔の街で, 属州コンマゲ  
ネの都である。そこで彼は115-125年の間に生まれた。はじめアラム語を学び, それからギリ  
シア語を学んだ。イオニア地方で修辞学の訓練を受けた後, 遍歴する弁論家となり, イタリ  
アからガリアまで旅をした。163年あるいは164年にシリアで, 自らの著作によってルキウス・  
ウェルス帝 (在位: 161-169年) の愛顧を得ようとする。間もなくパフラゴニア地方のアボヌ  
テイコスで偽預言者アレクサンドロスと対立する。160年代と170年代, アテナイに長期滞在  
した。晩年にエジプトで高官になる。180年代の末あるいは190年代の初めに死亡した。(*DNP*,  
Bd.7, Lukianos, [1999], K.493; *DNP*, Suppl.2, Lukianos [1] aus Samosata, [2007], S.378;  
 *OCD* <sup>4</sup>, Lucian, [2012], p.861)。
- 2) この作品には125の写本があって  $\gamma$  系統と  $\beta$  系統に別れるが, 最古の写本は Harleianus 5694  
(914年頃) であり, 最も保存状態の良い写本は Vaticanus gr. 90 (10世紀初頭) である (Rabe  
[1906], p.III-IX; Victor [1997], S.57-79; *DNP*, Suppl.2, Lukianos [1] aus Samosata, [2007],  
S.378-382)。テキスト・翻訳・註釈の主要なものとしては, Talbot [1857]; Fischer [ca.1900];  
Rabe [1906]; Harmon [1925]; Caster [1938]; 高津 [1947]; Macleod [1974]; Victor [1997]; 内  
田 [2013]; Regius [2017]; Ozanam [2018]などが挙げられる。これらの中で内田 [2013]の訳  
と註を大いに参考にしたが, 小論におけるテキストの日本語訳は全て筆者による。
- 3) クロノロジーについては, Cumont [1887], p.47-54; *RE*, Bd.1/2, 70) Alexandros aus  
Abonuteichos, [1894], K.1444-1445; Harmon [1925], p.173; *DNP*, Bd.1, Alexandros [27, aus  
Abonuteichos], [1996], K.482-483; *DNP*, Suppl.2, Lukianos [1] aus Samosata, [2007], S.378;  
Victor [1997], S.1, S.6-7;  *OCD* <sup>4</sup>, Lucian, [2012], p.861などを参照した。
- 4) この都市の名前の意味は「アボノスの砦」。おそらく非ギリシア語に由来するが, イオノポリ

スはギリシア風の名前である（Jones [1986], p.146）。現在の名前 Inebulo は Ionopolis の訛り（Regius [2017], p.118）。なぜ Glycopolis としなかったのか。Iono はグノーシスの神 Iao とする説もある（Caster [1938], p.77）。あるいはイオニアの母都市の意味か？

- 5) この神託所の存続は250年頃までとする説（*RE*, Bd.1/2, 70）Alexandros aus Abonuteichos, [1894], K.1144-1145; *DNP*, Bd.1, Alexandros [27, aus Abonuteichos], [1996], K.482）。
- 6) 以前の評価については, Jones [1986], p.133, n.1.
- 7) このケルソスが, 2-3世紀の神学者オリゲネスが『ケルソス論駁』で論駁したところの, 『真理の言葉』でキリスト教を批判中傷した2世紀の異教徒哲学者ケルソス（出村 [1988], 45頁）と同一人物かは不明であるが（Victor [1997], S.132; 内田 [2013], 213頁, 註1; Ozanam [2018], p.691, n.1）, 否定的な見方が主流である（Harmon [1925], p.174-175, n.1; Caster [1938], p.1; Jones [1986], p.133）。Talbot は同一人物と見なす（[1857], p.453, n.2）。『真理の言葉』の著者ケルソスはエピクロス派ではなくプラトン主義者であり, またオリゲネス自身, ケルソスという著者を二人知っていたが, 自分が攻撃したケルソスがどちらなのか知らなかったという（Victor [1997], S.132; 内田 [2013], 213頁, 註1）。
- 8) この本は失われたが, 3世紀のヒッポリュトスの『全ての異端説への反駁』4.34に, 魔術師の封印破りの手口の解説があり, ケルソスの本を参考にしたものとも言われている（Harmon [1925], p.204, n.1; 内田 [2013], 235頁, 註6; Regius [2017], p.53）。
- 9) パフラゴニア地方はアボヌテイコス市の南方に広がる山岳地帯である（*Barrington Atlas* [2000], p.86）。北は黒海南岸, 西はビライオス川を境にしてピテュニア地方に, 東はハリュス川を境にポントス地方に, 北はガングラ盆地を含んで, ガラティア地方に接している（*DNP*, Bd.9, Paphlagonia, [2000], K.282）。古代の著作物におけるパフラゴニア人の評判は常に悪く, 例えば, 戦争好きであるが結束できない, 無骨者, 愚か者, 迷信深い, ニンニク臭いなどと言われた（Caster [1938], p.17-18; *DNP*, Bd.9, Paphlagonia, [2000], K.282）。
- 10) 『 』内の文章は, ホメロス『オデュッセウス』4.230からの引用である（Talbot [1857], p.455, n.2; Harmon [1925], p.183, n.1; Ozanam [2018], p.693, n.2）。内容（呉茂一訳『オデュッセイアー』上, 108-109頁）は, アルゴス生まれのヘレネがトーン王の妃ポリュダムナからもらった, 苦悩を消す薬をワインに入れるという話で, エジプトでは薬になる草も毒になる草も生え, 土地の人々は皆, 薬草の知識を持った医者であったという。この一節から, 医術とエジプトのコネクションが示唆される。
- 11) 「悲劇」とは, ここでは「ありとあらゆる詐術」whole bag of tricks（Harmon [1925], p.183）のことを指している。
- 12) 彼女が誰かは不明（Victor [1997], S.136）。蛇とマダムの組み合わせは, オリンピアス→アレクサンドロス（大王／偽預言者）を連想させる虚構であろう（Jones [1986], p.136）。

- <sup>13)</sup> 「好都合な」 εὐκαιρον には「繁栄した」 ἐμπόρων という異読もある (Victor [1997], S.86)。
- <sup>14)</sup> アシアは、小アジア西部にある属州アシアを指す (Harmon [1925], p.186, n.1; Ozanam [2018], p.695, n.5)。
- <sup>15)</sup> 「金持ち」 πλουσίους には「バカな」 ἡλιθίους という異読もある (Victor [1997], S.86)。
- <sup>16)</sup> ここに「ザル占い師」 κοσκινόμαντις への言及がある (*Alex*.9)。古代の「ザル占い」が具体的にどのようなものであったかは不明であるが、17世紀ドイツの迷信に関する辞書によれば、何かが盗まれたような場合、二本の指でヤットコを持ち、その上にザルを乗せて、いつもの呪文を唱え、真犯人の名前が述べられた時に、ザルが震えだし動くという (Victor [1997], S.137; 内田 [2013], 223頁, 註4)。一方 Caster は17世紀の別バージョンを伝える ([1938], p.19)。ザル占いは、ルキアノスの時代においても極めて馬鹿げた迷信と見なされていた (Regius [2017], p.42)。
- <sup>17)</sup> シビュラについては、Caster [1938], p.22-24; 高津 [1960], シビュレーまたはシビュラ, 133頁; *DNP*, Bd.11, Sibylle, [2001], K.499-500; *OCD*<sup>4</sup>, Sibyl, [2012], p.1360-1361を参照した。
- <sup>18)</sup> 卵の手口もヒッポリュトス『全ての異端説への反駁』4.29に解説されている (Jones, [1986], 4.29)。
- <sup>19)</sup> これは「アスクレピオスの蛇」と呼ばれる、黄褐色で1.5m から2m ほどの長さの非常に人懐こい蛇で、アスクレピオス信仰に関連し、アスクレピオスの杖に巻き付いているのがこの蛇である (Caster [1938], p.15; Victor [1997], S.136; 内田 [2013], 221頁, 註3)。寿命は18-21年であった (Regius [2017], p.63)。
- <sup>20)</sup> キリスト教徒のヒッポリュトス (『全ての異端説への反駁』4.28) は、鶴やコウノトリや白鳥の気管を繋いだパイプを使って、同じようなトリックを行う方法について記述している (Harmon [1925] p.211; 内田 [2013], 241頁, 註2)。
- <sup>21)</sup> この語は「書板」 *tablette* (Talbot [1857], p.461), 「巻物」 *scroll* (Harmon [1925], p.201), 「書類」 *Schriftstück* (Victor [1997], S.97), 「書」 (内田 [2013], 233頁, 註5) と訳されている。しかし一般に、*βιβλίον* は *strip of papyrus*, *βίβλος* は *roll of papyrus* である。ただし冒頭の引用した *βιβλίον* は一片のパピルスではなく「小さな書物」という意味合いであろう。「紙片」 *feuille* の訳もある (Ozanam [2018], p.700)。
- <sup>22)</sup> 「紐で縛った」と訳した箇所の原文は *καταρράσαι* 「縫う」であるが、Harmon は「縛る」 *tie it up*, Victor は「縫い合わせる」 *vernähen*, Ozanam は「封をする」 *fermer* と訳している。結び目がなければ、封印できないだろう。
- <sup>23)</sup> Harmon [1925], p.207; 内田 [2013], 236頁; Regius [2017], p.51。
- <sup>24)</sup> 同様の手口の暴露は、ケルソス『魔術師を駁す』にも書かれている (*Alex*.21)。
- <sup>25)</sup> この語 *κυτμίς* は「インチキな薬の名」と訳されている (古川『ギリシャ語辞典』, 653頁)。語



源は不明であるが、熊の脂は薄毛、疥癬、しもやけ、腺の腫れ、痛風など効くとされた（内田 [2013], 237頁, 註1）。一方, ἀρκείου「熊の」は αἰγείου「山羊の」の異読もある（Harmon [1925], p.204; Regius [2017], p.56）。パフラゴニア地方では熊がよく出るらしい（Robert [1980], p.415; Jones [1986], p.139, n.34）。

<sup>26)</sup> この薬は ointment（Harmon [1925] p.205）, 「塗り薬」（内田 [2013], 236頁）と訳されているが, 原文からは塗り薬であるとははっきり分らない。強壯剤ならむしろ飲み薬ではないだろうか。

<sup>27)</sup> 「ペストを」λοιμούςという目的語を補う異読がある（Victor [1997], S.100）。

<sup>28)</sup> 「容易に」ῥαδίωςには, 「容易には～ない」οὐ ῥαδίωςという異読がある。文意の通りを考えて, Harmon や内田とは異なり, Victor や Ozanam と同様, 異読の方を採用した。この文を含む52節と先行する51節は, 本来は順番が逆であるとの校訂もあり（Harmon [1925], p.240, n.1; Victor [1997], S.166-167; 内田 [2013], 261頁, 註2; Ozanam [2018], p.714, n.2）, 文章が乱れている箇所である。

<sup>29)</sup> 因みに, スキュティア人に与えられた託宣は Μορφὴν εὐβάργουλις εἰς σκιὰν χνεχικραγῆ λείψει φάος (*Alex.*51(52)) という, まるで呪文のようなものであった。この中の εἰς σκιὰν は「影の中へ」, λείψει φάος は「(汝は) 光を残すだろう」というギリシア語であるが, 残りは不明であり, このテキストの由来も不明である（Harmon [1925] p.240-241, n.2; 内田 [2013], 261頁, 註3; cf. Caster [1938], p.71-72）。ただし Victor の読みは異なり, μορφευβαργουλις ἰσχυαγχνεχεψιδάοσδα である（[1997], S.122）。これを Ozanam は「エウバルグリスの美しさはクネキクラゲの影の中に光を残すだろう」と訳している（[2018], p.714; cf. Talbot [1857], p.474）。もう一つの呪文のような託宣は Σαβαρδαλαχου μαλαχααττηαλος ἦν (*Alex.*53)。最後の ἦν はギリシア語の「～であった」, 他は不明（内田 [2013], 261頁, 註4）。これを Ozanam は「マラカアテロスがサバルダカロスの息子であった」と訳す（[2018], p.714 cf. Talbot [1857], p.474; Caster [1938], p.72-73）。

<sup>30)</sup> この文章に続く, 彼は神聖な石を見るとそれに跪き接吻したといった表現は, テオフラストス『人さまざま』16.5; 16.13にも見られる表現で, 文学的な決まり文句であり, おそらく事実ではない（Caster [1938], p.55; Victor [1997], S.152; 内田 [2013], 243頁, 註8）。

<sup>31)</sup> ウァレンス帝（在位：364-378年）の後継者の名前を占いによって知ろうとしたフィドゥスティウスは, その行為が発覚すると死ぬほどの拷問にかけられた（Ammianus Marcellinus. 29.1. 6-9）。

<sup>32)</sup> マルコマンニ族, クァァディ族に対する166年頃, 170年から180年までの戦争（Talbot [1857], p.472, n.1; 内田 [2013], 257頁, 註3; Ozanam [2018], p.712, n.2）。

<sup>33)</sup> 「松明（によって）」ὕπὸ δαδιには「水によって」ὕδατιという異読もある（Victor [1997],

S.118)。

- <sup>34)</sup> この「海藻」σκιλληは「海ネギ」と呼ばれ、儀式の際の清めに使われたり、汁がなくなるまで皮を丁寧に洗ってピュタゴラスの食べ物にされたり、戸口に掛けて魔除けにしたりした (Victor [1997], S.164; 内田 [2013], 257頁, 註2)。
- <sup>35)</sup> 「希望」と「恐怖」のペアは他の文献でも見られるものであり、現存するエピクローロス派の書物には明確に見られないが、その反対概念はエピクローロス派の「不動心 (アトラクシア)」である (Victor [1997] S.137-138; cf. Caster [1938], p.16-17)。
- <sup>36)</sup> Jonesはこの襲撃をルキアノスの虚偽として疑っているが ([1986], p.146), Victorは真実であると考え ([1997], S.169)。
- <sup>37)</sup> そもそもアレクサンドロスもルキアノスも、ユダヤ人とキリスト教徒の区別が付いていなかったかもしれない (Regius [2017], p.62)。

## The Success Story of a Sorcerer: *Lucian's Alexander, the False Prophet*

Hiroshi MAENO

**Key words: Ancient Mediterranean World, Religion, Sorcerer, Magic, Curse Tablet, Physician**

Lucian's *Alexander, the False Prophet*, written at the end of the 2<sup>nd</sup> century, illustrates the life of a sorcerer who lived during the same era as the author. According to this work, the protagonist, Alexander, was born in the city of Abonoteichus on the south coast of the Black Sea. As a child, he became an apprentice to a sorcerer who called himself a public physician and learned how to prepare medicine and poison, besides learning sorcery. When he grew into a young man, his master passed away. He then went on a journey to train himself to work independently, found a like-minded young man on his travels, and made plans to start an oracle. He established an oracle with Glycon—the God with a human head and a serpent's body—as its chief God. The oracle gained instant popularity, with its fame spreading as far as Rome, thereby enabling Alexander to become acquainted with senior officials and emperors of the time.

The existence of this so-called *newly revived religion* has been archaeologically proven. Furthermore, Lucian, a satirist, has been reappraised as a historian in recent years. His work, *Alexander, the False Prophet*, is regarded as a primary historical record of the religious history of the eastern Roman empire at the time. It portrays how the revival of a traditional religion (worship of Glycon), Christianity (newly emerged then), and Epicureanism (the long-established principles of philosophers), had conflicted in a three-way competition for their survival. This work was mainly chosen for the type of sorcerer depicted in it. These type of sorcerers possibly manufactured and sold curse tablets, and presumably called themselves public physicians. Another reason is this work also presents the four steps required for a sorcerer to become successful: He must become (1) an apprentice, (2) a traveling sorcerer, (3) an oracle manager, and (4) a retainer sorcerer to an influential person. These could also be the four types of sorcerers. Using this record, this short essay aims to create coordinates to classify sorcerers. Graphically, the vertical *y-axis* coordinate is labeled *the distance to power* and the horizontal *x-axis* coordinate is labeled *the degree of mobility*. These classifying coordinates will be effective for future categorization of various types of sorcerers who had existed in the ancient Mediterranean world. They will also be helpful in positioning the type of sorcerers who had manufactured and sold curse tablets, a matter that remains unclear. A clearer understanding of this subject will contribute to a comprehensive understanding of religion in the ancient Mediterranean region.